

## 巻頭言 「青春の町」

宇野 元

私が太宰治の読者なのを御存じでしょう。太宰の作品に親しみを感じるのは、ひとつには私の青春時代の場所がでてくるからです。

東京駅から西に延びる JR 中央線の、新宿からさらに西の沿線。それらの町を舞台にした彼の話は過去のこと、けれども、町のおいと共に、確かに実在したことであり、実在することであると思えるのです。かつてあの場所で自分が思い、感じたことと重なるし、今、あの場所を歩いている人々、当時の自分と同じ年頃の人たちの現在が映し出されていると。「あるときは地の底に沈みこむようにして町角に佇んでいた。またあるときは、こみあげてくるよろこびのあまり、躍るようにして通りを急いだ」(池内紀)。時代が変わっても変わらない、世代をこえた体験が存在します。青春の町を再訪することは時間をこえることであり、もういちど自分のうちに若い心を感じることでありましょう。

なかでも吉祥寺の町は、高校の帰りによく寄り道したなつかしい場所です。変化の激しい東京の町のなかでは比較的当時の面影を保っています。今風に、きれいな町になりましたが、大きな構造は変わっていません。下の娘がこの町にある予備校に通いました。私と同じ年頃に、同じ町に。多少とも同じ心の体験をしているはず。

オイ、甘ったるい文章を書くなよ、と太宰は言うかもしれません。痛いことがあるだろう、お前さんも。おっしゃるとおりです、太宰さん。過去を美化するつもりはありませんよ。

十字架につけられたイエス・キリストの復活と、弟子たちの出会いは、何かこれと似ています。あるときは佇み、あるときは躍るようにして歩いた青春の地、ガリラヤで新しく出発させていただく。弟子たちにとって、復活の主との再会は、過去を振り返り、自らの破れを思い起こさせられる体験でした。しかしそれと同時に、それ以上に、過去の痛みを覆っていただく体験でした。それはいわば、初めの心を深く豊かに取りもどす体験でした。

イエス・キリストを信じて生きることは、福音書が記す弟子たちの歩みを歩むことです。聖書の言葉と共に彼らと同じ体験をすることです。すなわち、私たちも自分の力では取り返しのつかないことを示されます。しかし、それにもかかわらず、弟子たちのように起き上がらせていただきます。かたわらを歩んでくださる方によって。そうして、ふたたび、みたび、新鮮な心で前へ向かわせていただきます。